

第1問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現在、グローバル経済の進展により、※効率主義や成果主義がいびつな形ではびこっています。そのせいで「工学や自然科学系などと比べて生産性が低い」「※クリエイティブでもなく、効率も良くない」と人文社会科学を軽視する傾向が年を追うごとに強まっていますが、その主張には何の㉑コンキョもありません。

逆に人文系の教養の㉒ケツジヨは、批判精神の低下、発想の転換の鈍さ、コミュニケーション能力の劣化となって現れている。もつと言え、人文系教養の軽視と※反知性主義の進行は※パラレルにさえ見えます。

先の見通しが立たない現代においてこそ、また未来に起きうる危機に備えるためにも、A人文社会系の知識を学ぶ必要があるでしょう。未来を正しく予測することは誰にもできませんが、これまでの歴史の経験に従うならば、未来は「忘れられた過去の復活」、あるいは「忘れられた過去の再発見」というかたちで開かれていくからです。I、未来について考えるならば、礎石となる「歴史」を学び、修得した歴史の教訓を未来に応用していくことが求められます。

人文社会科学とは、人類が歩んできた歴史全般を扱う学問です。ゆえに、人文社会科学の教養のない人間が政治家になると、歴史認識において大きなつまずきを招いてしまいます。学問とは、言うなれば「私たちはどこから来て、どこへ向かうのか」という、過去と未来の橋渡しをする営みです。過去を踏まえた上で何を目指しているかという※コンセプトを組み立てる。そうした歴史を踏まえることで、ある程度の法則性が見えてくるのです。

そして「人間とは何か」「人間の抱え込む欲望や本能とは何か」という問いに対して、何らかの答えを差し出してくれる学問が文学です。その意味では、「B文学は実学である」と言えるでしょう。

昨今の政治家や官僚は、法案や不正に対する疑義に対し、十分な説明責任を果たさず、中学生にも見抜ける嘘でその場を取り繕ったり、また法案や政策の肝心な部分を隠蔽したり、中身空っぽのキラキラ・フレーズでごまかそうとしたり、逆に難解な用語を駆使して煙に巻こうとします。彼らは自分たちに敵しい批判を投げかけてくる人文系の学者たちを一掃し、政権に尻尾を振る※イエスマンで固めたいがためだけに、予算を削ることをちらつかせ、嫌がらせをしてきます。そうした※エセ文学的な「言葉の悪用」をする人々を批判するのが、文学の本来の役割なのです。

人類はおよそ七〇〇万年前に誕生しましたが、現在まで生き残っているのは「ホモ・サピエンス」ただ一種類だけです。現生人類であるホモ・サピエンスは二〇万年前に誕生したと言われていますが、それ以外にもネアンデルタール人と呼ばれる「ホモ・ネアンデルタールンシス」や、北京原人として知られる「ホモ・エレクトウス」など、私たちがよく似たヒトが多数存在していました。

類人猿にはチンパンジーやゴリラ、ボノボ、オランウータンと複数の種が存在しているのに、Cなぜか人類の場合はホモ・サピエンスしか生き残れませんでした。我々と類縁の他の種はすべて絶滅してしまっただけという人類学的な現実があります。

現生人類が言語能力を獲得したのは、今から五万年前とも七万五〇〇年前とも言われています。これには諸説あり、さらに考古学という分野は新しい発見があるとこれまでの記述ががらりと変わってしまうので、絶対的な真実とは言えませんが、ここではひとまず七万五〇〇年前としておきましょう。

人類の言語獲得を証明するのは、地層から出土した遺物です。七万五〇〇年前よりも古い地層から出てきた出土品と、それより新しい地層から出てきたものとは、明らかに違っていました。その

違いをもたらしたのが言語を獲得するための能力だと考えられています。七万五〇〇〇年前よりも古い地層からは、狩りのために使った矢じりや、肉を切るための石器といった、一目見て用途がわかるものしか出土していません。

Ⅱ、七万五〇〇〇年前に現生人類が住んでいたとされる南アフリカのブロンボス洞窟からは、何に使っていたのかすぐにはわからない幾何学模様が刻まれた土片（オーカー）が二〇〇〇年に発見されています。Ⅲ二〇〇四年には、同じ洞窟の地層からアクセサリーのようなビーズ状になった巻貝が多数発見されました。用途のわからないもの、それらはひと口に言えば、「アート」としか呼びようのないものでした。

人が会話を行うには複雑な文節言語を使いこなさなければならず、そのためには物事を象徴化・抽象化する能力が必要です。実用的ではないものを作製したことは、人類が「象徴機能」を身に着けた証とされています。

言葉とは、すなわち「現実にはないもの」を記号に置き換えて表現することです。そのような働きを「象徴機能」と言います。この能力がなければ、単純な感情伝達はできるかもしれませんが、複雑な会話を行うことは不可能です。

時代はずっと下りますが、スペインやフランスの洞窟からは、たくさん壁面が発見されています。アルタミラやラスコーの壁面は約一万年から二万年前に描かれた壁画と言われておりですが、このアートもまた人類が言語能力を獲得したからこそ生まれたものなのです。アートを創造し、楽しむためには、抽象的な図像を読み取れなくてはなりません。それには言語と同じく、象徴的な記号を読み取る能力が必要になってくるのです。

目の前に存在しないものを想像によってつくり出す——Dこれが言語のマジックであり、同時に本質と言えます。人類はこのとてつもない能力を獲得したことで、その後、様々な文明をつくり上げていきました。

最近まで——と言ってもそれはおよそ三万年前ですが、ネアンデルタール人は地上に存在していました。しかも、ネアンデルタール人と現生人類であるホモ・サピエンスは、ある時期まで共生し、交雑もしていたと言われています。これは現生人類の核DNAに、ネアンデルタール系の遺伝子が残っていることから見ても明らかです。

しかし、ネアンデルタール人は滅び、ホモ・サピエンスは今日に至るまで繁栄を続けています。結果、人類の人口は現在七六億人を突破しました。

ホモ・サピエンスは地球上のあらゆる③カンキョウに適応し、温暖化や寒冷化、乾燥化、火山の破局的噴火などの気候変動にも対応してきました。天体の運行と気象の④インガ関係に気づき、物質の特性や自然の法則を発見し、自然に加工を施す技術を洗練させ、自然界に存在しない人工物を次々と生み出すようになりました。

私たちの遠い先祖の知恵は代々受け継がれ、※踏襲されてきました。その知恵が差別や独占、征服や虐殺⑤というかたちでハツキされることもありました。生物学的には、共存共生を目指した方が結局はより多くの生存に有利になりますが、人がひとたび権力を手中にすると、それを維持することに躍起になるその習性が改まることはありませんでした。

E人類は自然界の中に生まれながら、自然界には存在しないものを築き上げ、地上の王として※君臨していきました。それを可能としたのが、これまで述べてきた通り言語であり言語能力なのです。こうした長い歴史を踏まえれば、言語能力をどう生かすが、我々が生きていく営み、ひいては人類の未来を左右することがわかるでしょう。こういうことが文学の前提にあります。

（ 島田雅彦 『深読み日本文学』 一部改変 ）

※（文中のことばの意味）

効率主義や成果主義 … 国家や企業が、業務や作業効率の面にお

いて、その成果だけを重視する考え方。

クリエイティブ … 創造的（性）。

反知性主義 … 知性や理性を重視する傾向に反対する考え方。

パラレル … 平行なこと。また、二つの物事の状態などが相似の

関係にあること。

コンセプト … 概念。物事に共通している特徴。

イエスマン … 人の言うことに何でも「はい、はい」と言っ

て、無批判に従うような人のこと。

エセ … 似てはいるが本物ではないということ。

踏襲 … 今までのやり方をそのまま受け継ぐこと。

君臨 … ある分野で、強大な力を持って他を支配すること。ま

た、支配しようとする立場に立つこと。

問 2

I ~ III に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 1

- | | | | |
|---|-------|---------|-----------|
| ① | I しかし | II たとえば | III そして |
| ② | I だから | II ところが | III さらに |
| ③ | I つまり | II あるいは | III だが |
| ④ | I さて | II また | III したがって |

問 3

線 A 「人文社会系の知識を学ぶ必要がある」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 2

- ① 人文社会系の学問は自然科学系の学問と比べて、現実的な効果は生み出さないが、コミュニケーション能力を強化することができるから。
- ② 人文社会系の知識を修得することは、ホモ・サピエンスが繁栄した長い歴史を学ぶことにつながり、他の現生人類と比べ優れているという事実を知ることになるから。
- ③ 人文社会系の学問は歴史全般を扱う学問であり、歴史を学ぶことから得られる多くの教訓が、未来への展望を予測することにつながるから。
- ④ 人文社会系の知識を修得することは、我々人類の進化の中で重要な役割を果たしてきたものとして、過去の歴史を再発見することにつながるから。

問 1

線 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。解答番号は裏面の 101 ~ 105

a 「コンキョ」 101

b 「ケツジヨ」 102

c 「カンキョウ」 103

d 「インガ」 104

e 「ハッキ」 105

問4 ———線B「文学は実学である」とありますが、どうい

ことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **3**

① グローバル経済が進展する現代では、人文社会系の知識を修得することは無益であるという風潮があるので、「文学」は歴史をひもとく一つの手段として世の中や社会に貢献できる学問だということ。

② 人文社会系の学問は自然科学系の学問と比べて、創造性に乏しく非効率的だとする傾向が強い現代だからこそ、「文学」は人間存在の本質に迫り、その答えを導くことができる学問だということ。

③ 自然科学系の学問を重視し生産性ばかり追求した結果、今の政治家に象徴されるような教養のない人々が多い時代になったので、「文学」は忘れられた過去を回顧するための貴重な学問だということ。

④ 未来に関して予期できない現代では発想の転換が求められているが、過去の歴史の教訓が生かせない時代だからこそ、「文学」は言葉を武器にして新たな時代を創造するだけの実効性がある学問だということ。

問5 ———線C「なぜか人類の場合はホモ・サピエンスしか生き残れませんでした」とありますが、その歴史的理由を説明した次の文の **ア**～**ウ**に入る最も適当な語を、あとの①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は **ア**が **4** ・ **イ**が **5** ・ **ウ**が **6**

人類がたどってきた歴史の中で、ホモ・サピエンスだけが生き残ることができた理由は、七万五〇〇〇年前を境に地層から出土した遺物の違いによって説明できる。その違いとは、地層から出土した遺物が何に使われていたのかという **ア** が、「わかるもの」から「わからないもの」に変わったことに端を発している。現生人類が残した洞窟から出土した土器の模様や描かれた壁画は「アート」と呼ばれ、これらから、物事を **イ** 化する能力を持っていたということがわかる。つまり、「アート」を創造し、楽しむための能力、言い換えるならば、**ウ** を読み取る能力を持つていたと推察できる。この途方もない能力を獲得することによって、ホモ・サピエンスは生き残ることができ、繁栄の道をたどることになった。

- ④ ① 象徴
用途
⑤ ② 単純
言語
⑥ ③ 複雑
創造

問6 ———線D「これが言語のマジックであり」とありますが、

が、どういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **7**

- ① 人類は言語能力を獲得したことで、その想像性によって多様な文明をもつくり出すことになったということ。
- ② 人類は抽象的な記号を読み取る能力を身につけたことで、豊かなコミュニケーション能力を獲得したということ。
- ③ 人類は実用的でないものをつくり出した結果、人口が七六億人を突破するほどの生産性を獲得したということ。
- ④ 人類は「アート」を創造することで、単純でなく複雑な会話を行うことが可能になったということ。

問7 ———線E「人類は自然界の中に生まれながら、自然界には存在しないものを築き上げ、地上の王として君臨くんりんしていきま

した」とありますが、このような状況の中で、言語を獲得した人類である我々は、「文学」をどのように生かすべきだと筆者は述べていますか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **8**

- ① 現代社会で生き抜く能力として、多様な言語を運用できるように生かすべきだ。
- ② 言葉を利用し権力を振りかざす人たちに対して、批判できるように生かすべきだ。
- ③ 予想不可能な未来に向けて、生産性を高められるように生かすべきだ。
- ④ 我々の生きる営みとして、さらには人類の繁栄のために生かすべきだ。

問8 本文の論の進め方の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **9**

- ① 最初に自然科学系学問の優位性を説明し、次に歴史を学ぶことの意義を論じている。そして、過去から現在の橋渡しの役割を果たす学問としての「文学」が、今後、言語的問題をどのように解決すべきかを考察している。
- ② 最初に人文社会系の知識の必要性を説明し、次に「文学」の果たすべき役割を論じている。そして、人類が言語能力を獲得した長い歴史を考察した上で、いびつな現代社会の中で「文学」の本質をとらえ直すことを強調している。
- ③ 最初に人文社会系の学問軽視の風潮を否定し、次に昨今の権力者たちの横暴さを批判する「文学」の重要性を説いている。そして、未来に関する言論や表現の自由をいかに確保すべきかについて持論を添えている。
- ④ 最初に人間の存在そのものを追求する学問が「文学」であると定義し、次に人類が言語能力を身につけることで存在しないものを創造した歴史を考察している。そして、人類の未来を歴史学を中心に展望しようとしている。

第2問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

荒木公平の人生は——人生というのがおおげさであるならば会社人生は——、辞書に捧げられてきたと言っても過言ではない。

荒木は幼いころから言葉に興味があった。

たとえば、犬。そこにいるのに、いぬ。はは、おかしい。いまだつたら女性社員から、「荒木さん、オヤジギヤグはやめていただけますか」と言われてしまいそんなことを、子どものくせに思いついては愉快な気持ちになっていた。

犬は、動物の犬だけを意味する単語ではない。

父親に連れていってもらった映画館のスクリーンで、「※官憲の犬めがあ！」と裏切りに遭った瀕死のヤクザが血まみれで叫んでいた。そこで荒木は、敵対する組織から送りこまれたスパイのことも犬と称するのだと知った。

自分が瀕死の状態にあると報を受けた組長は、すつくと立ちあがって言った。

「おまえら、なにをボサツとしちよるんじゃ！ ドスを磨けい！ やつを犬死にさせちゃあいかんぜよ！」

そこで荒木は、犬という言葉が「無駄」に相当する意味も持つのだと知った。

動物の犬は、人間にとって忠実なる相棒である。信頼のおける、賢く愛らしい友である。にもかかわらず、同じ「犬」という言葉が、卑怯な※内通者や物事の無意味さを指しもするのは、不思議なことだ。動物の犬が性質として持ちあわせる、ときとして卑屈なまでの忠実さ。ひとに尽くせば尽くすほど際立つ、※不憫なまでの報われなさ。あるいはそれらが、「犬」にマイナスの意味をも付与したのかもしれない。

Aとまあ、そんなことを考えては一人で楽しんでいた荒木だったが、辞書の存在を意識したのは遅かった。中学校の入学祝いに、叔

父から『岩波国語辞典』をもらったのが最初だ。

はじめて自分だけの辞書を手に入れた荒木は、この書物に夢中になった。

荒木の両親は※荒物屋を営んでおり、仕入れや店番で忙しかった。必然的に息子に対しては、「他人さまに迷惑をかけず、元気でやっているならそれでいい」という教育方針だった。わざわざ辞書を買って与え、「勉強しろ」と言うような発想は両親にはなかった。荒木の両親にかぎらず、当時の大人の大半がそうだった。

荒木ももちろん、勉強よりも外で友だちと遊ぶほうが好きだったから、小学生のころは、教室に一冊だけ置いてあった国語辞書のことなど、たいして気にもとめていなかった。たまに背表紙が視界に入るだけの、置物にすぎなかった。

B実際にめくって見た辞書のおもしろさといったら、どうだろう。ぴかぴかの表紙、どのページにもびっしりと印刷された文字のつらなり、薄い紙の感触。すべてが荒木を虜にした。なによりも荒木の心をとらえたのは、簡潔に見出し語の意味を説明する語釈の部分だ。

荒木はある晩、弟と茶の間でふざけていて、「大声を出すな」と父親に叱られた。試みに、「こえ【声】」という言葉が『岩波国語辞典』で引いてみた。語釈はこうだった。

人や動物が、のどにある特殊器官を使って出す音。それに似た音。季節・時期などが近づくけはい。

作例として、「声」を使った文章も載っている。「声を上げる」や「虫の声」ぐらいは、なんとなく意味を把握して使っていたが、「秋の声」「四十の声をきく」にいたっては①咄嗟に思いつかなかった。

言われてみればそのとおりだ、と荒木は思った。「声」にはたしかに、「季節・時期などが近づくけはい」の意味もある。「犬」の

一語に、多様な意味がこめられているのと同じように。語釈を読むと、ふだんから使っている言葉に思いがけない広がりや奥行きがあることに気づかされるのだった。

それにしても、「のどにある特殊器官」という説明は思わせぶりだ。荒木は父親に叱られたことも、かまってほしがってまとわりついてくる弟のこともほっぽって、なおも辞書を引いた。

とくしゅ【特殊】①普通とは質的に違うこと。性質が特別であること。②「哲学」普遍に対し、その個々の場合・事物になるもの。

きかん【器官】生物体を構成し、一定の形態をし、特定の生理機能をもつ部分。

わかつたようなわからぬような説明だ。

「のどにある特殊器官」とは声帯を指すのだろうと見当がついたので、荒木は追究をそこまでしておいた。もし声帯を知らないひとが『岩波国語辞典』を引いたら、「のどにある特殊器官」は謎の器官のままである。

辞書は必ずしも万能ではないと知り、^C荒木は落胆するどころか、ますます愛着を深めた。かゆいところに手が届ききらぬ箇所があるのも、がんばっている感じがして、とてもいい。決して完全無欠ではないからこそ、むしろ、辞書を作ったひとたちの努力と熱気が伝わってくるような気がした。

一見しただけでは無機質な言葉の羅列だが、この膨大な数の見出し語や語釈や作例はすべて、だれかが考えに考え抜いて書いたものなのだ。なんとという根気。なんとという言葉への執念。

小遣いが貯まるたびに、荒木は古本屋へ走った。辞書は改版されると、それ以前の版が古本屋で安価で売買されることが多い。異なる出版社のさまざまな辞書を、少しずつ集めて読み比べた。使いこまれて表紙がちぎれたもの。まえの持ち主の書きこみや赤線の残る

もの。^D古い辞書には、作り手と使い手の言葉との格闘の跡が刻印されている。

国語学か言語学の学者になって、俺も自分の手で辞書を編みたい。高校二年生の夏に、荒木は大学に進学させてくれと父親に頼んだ。

「はあ？ 国語学って、なんだそりゃ。おまえ、日本語しゃべれるじゃねえか。なんで大学行ってまで国語を勉強する必要がある」

「いや、そうじゃなくて」

「そんなことより、店の手伝いしろ。母ちゃん腰痛めちゃってんだぞ」

てんで話の通じない父親を説得したのは、『岩波国語辞典』をくれた叔父だった。

「まあまあ、兄貴」

数年に一回しか実家の荒物屋に顔を出さない叔父は、[※]鷹揚に仲裁した。叔父は捕鯨船の乗組員で、長い航海のあいだに辞書の味を覚えたらしい。親戚のあいだでは変わりもので通っていた。

「公ちゃんはわりと賢い子じゃないか。思いきって大学へやったらどうだい」

荒木は^⑥猛然と受験勉強に取り組み、大学に入った。四年のあいだに、残念ながら自分には学者になれるほどのセンスはないと察しがついたが、辞書を作りたいと願う気持ちは抑えがたかった。^E大学四年生になった年、小学館から『日本国語大辞典』が刊行されはじめたことも大きかった。

これは、全二十巻という大部の辞書だった。編集作業に十年以上の年月をかけ、約四十五万項目を収録。協力者は三千名に及ぶと言われた。

貧乏学生の身では手が出ない。大学図書館に並ぶ『日本国語大辞典』を、荒木は震える思いで眺めた。大勢のひとの情熱と時間が注ぎこまれた辞書を。埃くさい静かな図書館の書架で、それは夜空に浮かぶ月のごとく、清浄な輝きを放っているように見えた。

学者として、辞書の表紙に名を載せることは俺にはできない。編集者として、辞書づくりに携わる道はまだ残されている。俺はどうしたって、辞書を作りたい。俺の持てる情熱と時間のすべてを注ぎこんでも悔いのないもの。それが辞書だ。

荒木は猛然と就職活動を繰り広げ、大手総合出版社の玄武書房に入社した。

「それから、辞書づくりひとすじ三十七年ですわ」

「ほう、もうそんなになりますかねえ」

「先生が一番最初に手にした辞書はなんです」

「祖父の遺品として譲り受けた、大槻文彦の『言海』ですね。多大な困難を乗り越え、大槻が一人で※編纂した辞書だと知り、子どもごろにおおいに感銘を受けたものです」

「ずいぶんたくさんの辞書を、一緒に作りました。ひとつの辞書を作りあげても、すぐに改訂や改版作業に追われ、ゆっくり語りあうこともできないほどだった。『玄武現代語辞典』、『玄武学習国語辞典』、『字玄』。どれも思い出深い」

「最後までお手伝いすることができず、本当に申し訳ないです」

荒木はテーブルに両手をつき、深々と頭を下げた。※用例採集カードを束ねた松本先生は、気落ちしたのか、Fめずらしく背中を少し丸めた。

「やはり、定年になるのをのばせそうにありませんか」

「※すまじきものは宮仕え、です」

「※囑託でもいい」

「できるだけ編集部に顔を出すつもりではいますが……。女房の具合が、どうも芳しくないんですわ。これまで辞書漬けで、なんにもしてやれませんでしたから、せめて定年後はそばについてやりたい」

「そうですか」

G「いよいよつむいてしまった松本先生だが、明らかに空元氣とわかる調子で言った。「いや、それがいい。今度は荒木君が、奥さん

を支えてさしあげる番だ」

先生のやる気を削いで、編集者として失格だ。荒木は顔を上げ、松本先生を励まそうと身を乗りだした。

「定年までになんとしても、わたしの後継となる社員を探します。先生を万全の態勢でお助けし、辞書編集部を統率し、わたしたち二人で立てた新しい辞書の企画を推進していける、若く有能な人材を」

「辞書の編集作業は、ほかの単行本や雑誌とはちがう。大変特殊な世界です。気長で、細かい作業を※厭わず、言葉に※耽溺し、しかし溺れきらず広い視野をも併せ持つ若者が、いまの時代にはたしているでしょうか」

「必ずいるはずです。※弊社の社員、五百余名のなかに見当たらないければ、他社から引き抜いてでも連れてきます。先生、どうか玄武書房に、ひきつづき先生のお力をお貸しください」

松本先生はうなずき、静かに言った。

「荒木君と辞書を作れて、本当によかった。きみがどんなにがんばって探してくれても、きみのような編集者とは、きつともう二度と出会えないでしょう」

◎不覚にも※嗚咽しそうになり、荒木はあわてて唇を噛みしめた。松本先生とともに本と校正刷りに埋もれて過ごした三十数年が、うつろい夢のように思われた。

「ありがとうございます、先生」

新しい辞書企画の立ちあげ半ばにして、会社を去らねばならないのは無念だ。辞書は荒木を構成する、ほとんどすべてだった。

同時に荒木は、新たな使命が胸に宿ったのも感じていた。親愛とさびしさと行く手に対する不安をたたえた、松本先生の表情を目にした瞬間に。

俺が辞書編集部員として果たすべき役割は、念願だった新しい辞書を完成させることだとばかり思ってきたが、そうではなかった。俺と同じように、いや、俺以上に、辞書を愛する人間を見つけろ

とだったのだ。

先生のために。日本語を使うひと、学ぶひとのために。なによりも、**H** 辞書という**貴い書物**のために。

最後の**大仕事**を**為し遂げる**べく、荒木は意欲に満ちて会社に戻った。

(三浦しをん 『舟を編む』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

官憲：役人。特に警察関係の役人。

内通者：組織の内部でひそかに敵に通じたり、情報をもらしたりしている裏切者のこと。

不憫：かわいそうなこと。気の毒なこと。

荒物屋：家庭用の雑貨類を売る店。雑貨屋。

鷹揚に：小さなことにこだわらずゆったりとしているさま。

編纂：いろいろな材料を集め、整理・加筆などして書物にまとめること。編集。

用例採集カード：気になった言葉や知らない言葉を記録するカード。

すまじきものは宮仕え：会社などに勤めるのは気苦労が多くつらいものだから、できるならしない方がよいということ。

嘱託：正式の職員とせず、臨時に業務を頼むこと。

厭わず：嫌がらず。

耽溺：一つのことにならなくなること。

弊社：自分の会社をへりくだってという語。

嗚咽：声をつまらせて泣くこと。

問1 線①～④の文中における意味として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 10 ～ 12

① 「咄嗟に」 10

- ① ふいに
- ② すぐに
- ③ さすがに
- ④ あらわに

② 「猛然と」 11

- ① 物事に驚かないさま
- ② しつこく凶々しいさま
- ③ 勇ましく強そうなさま
- ④ 全力をあげて取り組むさま

③ 「不覚にも」 12

- ① 用心していながら油断して失敗すること
- ② 心がはっきりとさだまっていないうこと
- ③ 覚悟がしっかり決まっていないうこと
- ④ 無意識のうちにそうなること

問2

——線A「とまあ、そんなことを考えては一人で楽しんでいた荒木だった」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **13**

- ① 同じ言葉でも使われる場面や状況によって異なる意味を持つことを知り、「言葉」に関して興味や関心が深まっていったということ。
- ② 同じ言葉がその言葉を使う人によってまったく違う意味に変化することを知り、「言葉」に対する不思議さを感じたということ。
- ③ 同じ言葉が指し示す意味は時代とともに移り変わることを世代の違う父から教わり、「言葉」が持つ豊かさに触れることができたということ。
- ④ 同じ言葉でも使い方によってはまったく逆の意味にもなりえることを知り、「言葉」における不確かさをもてあそぶようになったということ。

問3

——線B「実際にめくってみた辞書のおもしろさといったら、どうだろう」とありますが、ここから初めて自分の辞書を手にした荒木のどのような心情を読み取ることができそうですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **14**

- ① 自分の辞書を初めて手にした荒木は、ひとつの言葉から多くの意味や内容が頭の中で次々と連想されていくことにたいへん喜んでいいる。
- ② のどから手が出るほど欲しかった辞書に満足している荒木は、その満足感とは裏腹に印刷された文字の無機質さにならずにぶん戸惑っている。
- ③ 真新しい辞書に魅了された荒木は、ふだん使っている身近な言葉にも思いがけない意味の広がりや奥深さがあることに気づかされ感動している。
- ④ それまで辞書を教室の片隅かたすみに置かれていた単なる置物としか見ていなかった荒木だが、人生を大きく変えるほどの力があることに驚いている。

問4 ———線C「荒木は落胆するどころか、ますます愛着を深

めた」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **15**

① 言葉というものは辞書をもってしても説明しきれないほど奥が深いことを知り、辞書が完成するまでに多くの人たちの熱意と努力があることを想像できたから。

② 辞書は言葉の意味をすべて解明できないからこそ空想することが可能だと気づき、自分ならどのような語釈や作例にするかと想像することが愉快でしかたなかったから。

③ 従来の辞書は言葉が無機質なまでに並べたものにすぎないので、将来、学者になってもっと優れた辞書を編集したいという夢を抱くきっかけになったから。

④ 言葉の意味を調べるためではない辞書と向かい合うことで、気のすすまない店の手伝いや父親に叱られる現実から解放される喜びを感じたから。

問5 ———線D「古い辞書には、作り手と使い手の言葉との格闘の跡が刻印されている」とありますが、どういうことですか。その説明をした次の文の **ア**・**イ** に入る語として最も適当なものを、あとの①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **ア**が **16**・**イ**が **17**

古本屋で買い集めた辞書には、その辞書を作った人たちの「言葉」と向かい合い懸命に取り組んだであろう根気強さや **ア**が、また、辞書を使う人たちの「言葉」と向かい合

った証としての書きこみなどからその **イ**が、それぞれ垣間見られるということ。

- ① 産物
② 歴史
③ 結晶
④ 辛抱強さ
⑤ 執念深さ

問6 ———線E「大学四年生になった年、小学館から『日本国

語大辞典』が刊行されはじめた」とありますが、この『日本国語大辞典』を見つめる荒木の心情が比喻表現を用いて描き出されている一文を文中からさがし、最初の五字を抜き出しなさい。解答番号は裏面の **106**

問7 ———線F「めずらしく背中を少し丸めた」、G「いよいよ

ようつむいてしまった」とありますが、これらの表現からわかる松本先生の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **18**

- ① 荒木の都合で仕事を途中で投げ出され、いま手がけている辞書が作れなくなってしまうことに憤慨している。
- ② 荒木が言った「辞書漬け」という状況は松本自身も同じなので他人事に思えず、自分の人生に困惑している。
- ③ 多くの辞書を一緒に作ってきた優秀な編集者荒木と、いまの仕事ができなくなってしまうことに消沈している。
- ④ なんとか荒木と仕事をしたいと提案したことを本人からことごとく断られ、自分の力のなさに愕然としている。

問8 ———線H「辞書という貴い書物」とありますが、荒木に

とって「辞書」という存在はどのようなものだと考えられますか。「辞書」と荒木の過去を踏まえたいうえで、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **19**

- ① 言葉の集積、つまり人間存在そのものの営み。
- ② 言葉の説明、つまり人間の知的探究のお手本。
- ③ 言葉の羅列、つまり人間の規律を重んじる慣習。
- ④ 言葉との格闘、つまり人間が意思疎通をはかる道具。

問9 この文章における表現と内容について説明したものと

最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **20**

- ① 「用例採集カード」や「校正刷り」などの、辞書を編集する作業にかかわる一般に知られていない専門的な用語を多用することで、編集者の仕事がいかに複雑であるかということ伝えていく。
- ② 動物の「犬」という言葉から、それを用いた慣用的な表現を取り挙げることによって、ひとつの言葉には多くの用例があることを何気ない日常の中で分かりやすく示そうとする意図がうかがえる。
- ③ 「古本屋へ走った」「辞書の味を覚えた」「辞書漬け」など多少大げさな表現を用いることにより、当時の人たちにとって辞書がどれほどめずらしいものだったかということを示そうとしている。
- ④ 荒木にとって「辞書」はまさに自身を「構成する」人生そのものであり、その長年にわたる辞書作りにかけて情熱や最後の大仕事である後継者探しの意欲が、「俺」という力強い表現から感じ取れる。

第3問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも今は昔、※丹波国篠村といふ所に、年ごろ、※平茸ひらたけやるか
たもなく多かりけり。里村の者これを取りて、人にも②心ざし、ま
たわれも食ひなどして年ごろ過ぐるほどに、その里にとりて※宗と
ある者の夢に、※頭かしらをつかみなる法師どもの二、三十人ばかり出
で来て、「申すべき事」といひければ、「いかなる人ぞ」と問ふ
に、「※この法師ばらは、この年ごろも※宮仕みやづかひよくしてさぶらひ
つるが、この里の縁尽きて今は※よそへまかりさぶらひなんずる事
の、A かつはあはれにもさぶらふ。また※事の由を申さではと思ひ
て、この由を申すなり」といふと見て、⑤うち驚きて、「こは何事
ぞ」と妻や子やなどに語るほどに、またその里の人の夢にもB この
定に見えたりとて、あまた同様に語れば、C 心も得で年も暮れぬ。
さて、次の年の九、十月にもなりぬるに、③さきさき出で来るほ
どなれば、山に入りて茸を求むるに、すべて※くさびらおほいた大方見え
ず。いかなる事にかと、里国の者思ひて過ぐるほどに、※故仲胤ちゆういん
僧都とて※説法④ならびなき人いましけり。この事を聞きて、「こ
はいかに、※不浄説法ふじやうする法師、平茸に生まるといふ事のあるもの

を」と※のたまひてけり。

されば、いかにもいかにも平茸は食はざらんに事欠くまじきもの
とぞ。

(『宇治拾遺物語』)

※(文中のことばの意味)

丹波国篠村：京都府亀岡市篠町一帯の地。
平茸：食用きのこ。

宗とある者：年をとって多くの経験をもっている人。長老。
頭をつかみなる法師：頭髪のかんりのびた法師。戒律(ル
ル)を破っている法師。

この法師ばらは：われわれ法師たちは。
宮仕ひよくしてさぶらひつるが：よく奉公してまいりました

よそへまかりさぶらひなんずる事：よそへ移ることになりました
が。
たこと。

事の由を申さではと思ひて：事の子細を申しあげずに去るのは
失礼かと思ひ。

くさびら：ここは「きのこの類」の意味。
故仲胤僧都：十二世紀半ばに活躍した比叡山の僧。
「故」とは、「今は亡き」の意味。

説法：仏教で、仏の教えを説き聞かせること。
不浄説法：仏法のためではなく、自分の名誉と利益のために
行う不浄な目的・動機による説法。
のたまひてけり：おっしゃった。

問1 線①～④の文中における意味として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。
 解答番号は 21 ～ 24

① 「心ざし」 21

- ① 運び
- ② 知らせ
- ③ 贈り
- ④ 供え

② 「うち驚きて」 22

- ① 起こして
- ② 目が覚めて
- ③ びっくりして
- ④ びっくりさせて

③ 「さきざき」 23

- ① 先端
- ② 将来
- ③ 前方
- ④ 例年

④ 「ならびなき」 24

- ① 普通の
- ② 特別の
- ③ 上手な
- ④ 下手な

問2 線A「かつはあはれにもさぶらふ」の現代語訳として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
 解答番号は 25

① (ほっとする半面、) 一方では苦しいことです。

② (ほっとする半面、) 一方ではうれしいことです。

③ (ほっとする半面、) 一方ではなごり惜しいことです。

④ (ほっとする半面、) 一方ではたのしいことです。

問3 線B「この定ちぎに」とは、「こんなふうちぎに」という意味ですが、その内容を具体的に示す文中の部分として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
 解答番号は 26

① 頭をつかみなる法師どものくこの由を申すなり

② 頭をつかみなる法師どものくこの由を申すなり」といふ

③ 頭をつかみなる法師どものくうち驚きて

④ 頭をつかみなる法師どものく妻や子やなどに語るほどに

問4

——線C「心も得で」とは、「理解できないで」という意味ですが、長老はどうして理解できないのでしょうか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **27**

- ① このことを他の村人たちに話したところ、同じ夢を見た人が何人もいることがわかったから。
- ② このことを妻や子に話したところ、同じ夢を見た人が何人もいることがわかったから。
- ③ このことを他の村人たちに話したところ、同じ夢を見た人が誰もいないことがわかったから。
- ④ このことを妻や子に話したところ、同じ夢を見た人が誰もいないことがわかったから。

問5

本文の内容と合致するものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **28**

- ① 篠村でたくさん生えていた平茸のおかげで、村里の者は豊かな生活ができるようになった。
- ② 篠村の者たちは同じような夢を見るようになり、村人みんなが幸せな生活をするようになった。
- ③ 篠村にたくさん生えていた平茸は、実は不浄な身で人に説教した僧の生まれかわりであった。
- ④ 篠村でとれなくなった平茸は、仲胤僧都のおかげでまたたくさんとれるようになった。

これで問題は終わりです。